



Title	日本語を第二言語とする定住者研究に関する一考察 : エスノグラフィーの可能性
Author(s)	八木, 真奈美
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 2003, 37, p. 29-46
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/56540">https://hdl.handle.net/11094/56540</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 日本語を第二言語とする 定住者研究に関する一考察

— エスノグラフィーの可能性 —

八木 真奈美

いろんな種類の花の中で好きな花があるように、自分にも好きな生き方があると思います。私が好きな花はひまわりです。昼間は花びらを閉じていて夜に花を開く、そんな花ではなく、太陽の光をいっぱいを受けて輝くひまわりです。時には風を、時には光をあびて大きな顔をみんなの前で開いてみせる花だからです。風は試練、ひかりは私の周りの人、あるいは私がおかれている環境です。いつも人と触れあいながら私を見せる。隠すことなしに素直な自分になるのです。ひまわりが大きな花と葉を太陽に向けてすべてを受け入れているように、私がおかれている環境のすべてを受け入れ大きくなるのです。

(S020610)<sup>1)</sup>

### 1. はじめに

私が日本語教育の世界に入った1980年代後半は、留学生や就学生を対象とした教室の中で行われる日本語教育が中心であり、日本語教育に携わるのは「教師と学習者だけであった」(J.V.ニューストプニー、1997:182)。しかし近年、定住者や日本人の配偶者など日本語を第二言語として日本で生活する人が増え、社会全体が生活レベルで、第二言語話者と接するようになった。彼らにとっては日本語の学習や習得がそもそもの滞在目的では

ないため、特定の日本語教育機関には所属しない場合が多い。またなぜ日本に住むようになったのか、日本での生活が彼／彼女にとってどういう意味をもつのかなど、日本で生活する事情や背景は一人一人異なっている。したがって、彼らを「日本語を学ぶ学習者」として一元的、固定的に捉えたり、生活から切り離された「日本語学習」のみを取り出しても、十分とは言えないのではないか、という疑問が残る。

第二言語の研究はその使い手である人間の研究である。しかし、従来の研究の多くは人間の多様性、矛盾、文脈などを出来るだけコントロールし、測定可能なものだけに目を向けて来たと言える。したがってことばの構造や機能が明らかになるなどの成果をあげてきた反面、そこからこぼれてしまったものもあるはずである。それを丁寧に記述するには、ことばをことばの側から見るのではなく、使い手である人間の側からみるという従来とは異なるアプローチが必要である。

Polkinghorne (1988) は、人間は物質、生命、意味が融合する統合的な存在で、人間を他の物質と区別し、人間たらしめている「意味の領域」は、人間という特別な総体と共にのみ存在するとして、人間研究における意味の領域の重要性を強調した。そしてこの意味の領域の研究においては、物質の領域の研究で伝統的に行われてきたのと同じタイプの、真実を演繹的に導くアプローチの有効性には限界があると指摘した。

研究というものが、微力でも人々の幸福に貢献し得る可能性があるとするれば、ことばを人間の側から見る試み、つまり全的人間として学習者を捉え、その学習者を取り巻く文脈とともに、学習者側からの意味づけを記述するというアプローチを試みる必要があるのではないだろうかと考える。

そこで本稿は、まず私がMの調査で援用した質的研究方法の一つ、エスノグラフィーが、なぜ従来とは異なるアプローチになり得るのかを、実証主義的研究に対比させる形で検討し、次に実際の調査の際、私がMを理解

するプロセスを記述して、定住する日本語学習者研究におけるエスノグラフィーの可能性を論じたい。

## 2. エスノグラフィー<sup>2)</sup>で何をみるのか

### 2.1. エスノグラフィー

エスノグラフィーの起源は文化人類学で、ポーランドの人類学者 Bronislaw Malinowski がエスノグラフィーの特徴である参与観察によるフィールドワークを最初に明確な形で打ち出したとされている。その後シカゴ学派と呼ばれる社会学者のグループもこの手法を採用したが、社会学の分野では決して主流の調査法ではなかった。やがて1970年代後半、質的研究に対する関心の高まりなどから再び注目を浴び、現在では心理学、教育学などさまざまな分野へ広がりを見せている。しかし、心理学や教育学の分野では、文化人類学や社会学のように、異文化社会の体系的なシステムや、都市というフィールドでの社会構造を記述して「文化の再現」(ヴァン＝マーネン、1999：19)を目指すのではなく、「人々の生きている意味世界を、微細なユニット、たとえば、親子間の言葉の掛け合いとか、対面的な日本語教授場面とか、教室での生徒同志のやりとりとか、一人一人の行動や語りなどに着目して読み解く」(箕浦、1999：11)ことを目的としている。そして箕浦は、この分野でのエスノグラフィーは「他者の生活世界がどのようなものか、他者がどのような意味世界に生きているかを描くことである。その人たちが世界をどのように見て、何を喜び、どのような行動をとるのか」(箕浦、1999：2)をその人の文脈ごと抽出しようとする試みであると述べている。

### 2.2. エスノグラフィーにおける私の立場

私が調査に援用したエスノグラフィーは、ミクロな次元に焦点を当て、

学習者の意味世界とその文脈を描くことを目指しており、この意味で前節で述べた箕浦の立場をとる。箕浦（1999）はその著の中で、社会的事実の認識様式として、コントの流れを汲む実証的アプローチとウエーバーの流れを汲む解釈的アプローチをあげ、その理論的立場を整理している。ここでは、そこで実証的アプローチの前提としてあげられている項目を参考に、それと対比する形で私の立場を述べていく。

### 2.2.1. ただ一つの現実

「研究の目的と現実把握：実証主義では、ただ一つの現実を前提として、その現実についての法則を定立しようとする。社会的現実是谁が見ようと同じに見える『本質的なもの』として実在する。再現可能な一定の手続きで明白な証拠を得て、それを理論的に説明できた時、その発見された事実を『客観的』とする。」（箕浦、1999：17）

これに対し、社会構築主義やポスト実証主義では“reality”を以下のように捉えている。「いま我々が目にしている現実は何となくの現実ではなく、歴史のおよび文化的に相対的なものであり、我々自身が日常的相互行為を通して作り上げたものである。」（バー、1997：6）「決して完全には捉えられない近似的（approximate）な現実」（Denzin, 1998：9）。エスノグラフィーは、しばしばその客観性の欠如が問題にあげられるが、バーやデンジンの立場に立てば、誰が見ても同じに見えるただ一つの現実は存在しないことになり、したがって客観性の欠如は問題とはならない。

私はMの意味世界を読み解くにあたって、三つの段階を経た。まず、フィールドに入って、「聞くこと」「見ること」という作業を通して得たものをデータとして収集する。次にデータからMの意味世界を解釈していく。この作業は、はじめの作業と同時進行的に行われ、解釈段階で何度もフィールドに立ち戻る。最後に、それをMの物語として書くという三つの段階である。これら三つの段階の最初のデータ収集段階で、フィールドに入っ

て「データを収集する」というと、あたかも客観的データを収集できるかのように錯覚するが、参与観察にしろ、インタビューにしろ、そこで起きたすべてを拾うことはできない。また、Goodall (2000: 95) が、「事実は個人的解釈である」と述べているように、観察するということは、すでに解釈行為なのであるということも認めなければならない。

では、これらの作業を通して、私が目指したものは何か。それは、「真実の断面」あるいは「真実にとってかわるもの」(Goodall, 2000: 54-55) を描く試みであったと考える。Mのいく通りもの真実のうちの、ある断面を「私」の解釈で切り取り、多様で等しく妥当なMの「小さな物語」(保坂, 2000: 425) の一つとして再現して、読み手に見せるということであった。

### 2.2.2. 文脈の排除

「研究の焦点とプロセス：実証主義では、観察可能な行動を測ることに主な関心があり、正しく測るため条件を統制することを重視し、その最たるものが実験室実験である。」(箕浦, 1999: 17)

しかし、「学習者」は「教師—学習者」という構図の中で「学習者」となるのであって、教室の中で文法や語彙をただ「満たしていく容器」(フレイレ, 1979: 66) ではない。「学習者」を生活している全的な人間として捉えようとすれば、その文脈を書かずに「学習者」を描くことは困難だと言えるだろう。なぜなら、学習者が「話す」ということは「自分は誰であるか、そして社会とどのように関係しているか」ということの認識の確認 (Churchill, 2002: 3) だからである。

今回の調査では、Mの第二言語生活をネットワークというキーワードを使って記述した。定住者であるMは、「教室の学習者」ではなく、社会の中で生活を確立しようとしている生活者であった。したがって、だれと、どこで、いつ、どのように話すのかを見るのが、どのように社会と関係しているのかを知ることであり、それを見るためには、Mの生活に倫理的に

許される範囲で参加し、そのMを取り巻く文脈をまるごと記述する必要があった。つまり「研究対象をその複雑な姿のままに、自然な日常の文脈の中で研究する」(フリック、2002:9) 試みであったと言える。

### 2.2.3. 「調査する側」と「される側」

「調査対象者と研究者のスタンス：被験者を実験者の教示どおりに動く受動的なインフォーマントと見なし、研究者は研究対象との間に距離をおき相手を客観的に見ようとする。」(箕浦、1999:18)

これに対し、古賀(1998)は、「対話者」としての調査者を強調し、したがってエスノグラフィーは「対話的实践」の方法となり、調査者と被調査者の「協働的作業」となると述べている。

調査期間中、Mは単なる「受動的なインフォーマント」ではなかった。調査の概要を説明した後、Mの家族や知人へのインタビュー、Mが出かける際の同行調査、そのほとんどの先方への許可や段取りの調整は、Mがやってくれた。もちろん私のわからないM側の事情もあっただろう。しかし、Mの協力なしには、ここまでデータを収集することはできなかったと言える。

また、Denzin(1998:4)は、「調査は“interactive”なプロセスで、調査者の個人的歴史、ジェンダー、階級、人種、おかれている環境に方向付けられる」と述べている。Goodall(2000:132-134)は「ストーリーを構築する書き手の3つの“positionings”——1.年齢、性別、国籍、人種などの“Fixed positions”、2.歴史、個人的経験の“Subjective positions”、3.物語を再現するためのことばの選択の“Textual positions”——がストーリーの構築に影響すると述べている。

本調査の期間中、データ収集、解釈、ストーリーを書くという全ての段階で、「私」の内なる“positionings”との交渉が常に行われ、Mの意味づけを探究しながら、自分の生きてきた意味づけが試されるという作業があっ

た。したがって「私」が調査の一部となるということを排除することはなかった。

### 3. Mを理解したプロセス

#### 3.1. 調査の概要と調査協力者 M

本稿の目的はMの調査結果の報告ではないが、なぜ研究協力者と調査者の関係が重要なのかを述べるために、調査の概要を簡単に記しておく。

本調査の協力者であるMは日本人の夫を持つ韓国人女性である。1998年、母国である韓国の日本語学院で日本語の学習を始めた。半年ほど勉強した後、日本に留学することを決めていたが、Mの夫と1999年12月に知り合い、結婚が決まったことで、留学計画は中止した。そして、2000年秋に日本人の配偶者として来日し、現在は夫とその母の三人で暮らしている。来日後、2001年から地域の国際交流センターの主催するボランティア講師による1対1の作文の授業を週1回受けている。

2002年の2月下旬、修士論文作成のために市の国際交流センターの掲示板に貼った「調査者募集」の貼り紙を見て、電話をくれたのがMだった。会って調査について説明した際、以前弟の修士論文作成を近くで見ていたと言って、論文のための調査に理解を示してくれたため、その場でMに協力を依頼した。データ収集は、Mのネットワーク、つまり、Mがいつ、どこで、だれと、どんなふうに話しているかを知るため、先にMのインタビューをとり、その中から鍵になると思われる人物のインタビューや、Mがよく出かける場所へ同行した。

- 1 参与観察：外出の際に同行4回、地域の日本語教室での授業、調査の打ち合わせ、電話、すべてフィールドノートをつけた。
- 2 インタビュー：M本人、Mのネットワーク上の人物（夫、義母、国際交流センターの講師、Mの家の下宿人であった韓国人就学生、知



人2名)

- 3 人工物の収集：韓国の日本語学院での日本語授業ノート、地域の日本語教室で書いた作文 (25編)、国際交流センターのスピーチコンテストに出場した際のスピーチ原稿

### 3.2. 「ひまわり」

冒頭にあげた「ひまわり」の作文は、Mが日本語教室の授業で書いたものである。質問紙票による調査や構造化されたインタビューでは、このような被調査者の書いた文や、インタビューの合間の語りは、エピソードとして研究者の心の中に留まるか、もしくはどこかに埋もれてしまって取り上げられることは少ない。しかしこの作文は、彼女が自分の生き方をひまわりという花にたとえ、現在の自分とありたい自分を表現したもので、彼女が自分自身をどう捉えているのかということが表れている。夏の季節の代名詞となるような明るく輝く「ひまわり」の中心性と、夫の要求する「日本人」というゴールに届かず、家庭の中で「排斥された」(Norton, 2000: 7) Mの周辺性との隔たりが、分析の段階で、ある現実の強さを持って私の前に立ち現れ、Mへの理解へと導いた。

今回の調査では、協力者Mを受動的なインフォーマントと考えたり、調査者である私と距離を置くというような実証主義的アプローチはとらなかった。それは何か理論的な背景や方法論に従うというより、調査期間中、一人の人間としてのMに関心を持ち、関心を持つがゆえに、インタビューや雑談での語り、居合わせた場での出来事などに、ある時は疑問が湧き、またある時はまさに直感的に理解し受け止めるというMの意味世界と私の意味世界の渦の中に身を置くということだった。

### 3.3. Separate Knowing と Connected Knowing

では、具体的にどのようなプロセスでMを理解したのか、ここでは Separate Knowing と Connected Knowing (Belenky et al, 1986) という概念を基に述べていく。Separate Knowing と Connected Knowing は知り方や学び方の一つとして紹介されているが、Separate Knowing は「隔たり」「疑い」と特徴づけることができ、知ろうとするものへの公平なスタンス、「～に対する思考」が強調される。一方、Connected Knowing は、信じるという立場、そして知ろうとする考えや相手の位置へ入ること、「～とともに思考する」が強調される。つまり Separate Knowing では相手を対象化して理解するのに対し、Connected Knowing は相手との関係の中で、相手の場所で理解することであると言えるだろう。

#### 3.3.1. M を受け止めるということ

Mが「調査者募集」の貼り紙を見たのは、スピーチコンテストの日だったそうだ。原稿の添削をしてくれた先生はいいと言ったが、自分は文末表現が気に入らず、納得がいかないまま出場し、「スピーチ終って日本語もう話したくないという気持ちになって、ブルーになって掲示板を見ていたら、この掲示があった。電話してみようと思った」(F020226)と言った。

これは推測の域を出ない。が、Mは自分の話をきいてくれる誰か、または話をする場を求めていたのではないかと思う。インタビューの後、打合わせの前後、同行調査の際など、我々はよく雑談をしたが、Mの話のほとんどが家庭での夫との出来事だった。Mの夫はMが「正しい日本語」(I020803)を話せるようになるために、テレビは教育テレビかNHKを見るように言い、次に小学校の教科書を購入してMに渡し、Mの日本語に間違いがあれば厳しく叱って直した。またMを「嫁としてもらった」(I020803)、「日本人で生きていかなきゃならない」(I020723)のだからという考えの基に、箸の持ち方からお椀の持ち方まで注意し、当初は韓国語や韓国の習慣

は全く認めなかった。

調査を始めた頃のインタビューでは、時折涙ぐみながら話すMの話さう受け止めていいかわからず、戸惑いを覚えることもあった。なぜなら、私の「個人的な経験とつながるものをかき回して探し (rummage)」(Clinchy, 1996: 210) ても、ひっきりそうなものはなく、私は彼女の友達ではなく、調査者であり、聞き手だという思いが強かったからだ。かといって調査者として単なる客観的なデータとして処理するには、抵抗を感じるほどの圧倒的な現実であった。

Separate Knowing は、被調査者を理解するために調査者がどう感じたかは問題にならないが、Connected Knowing は「感情」を切り離して考えることはできない。そして相手の経験を主体的に理解するには、知的な理解以上のものが求められるが、それは単なる同情的な理解を示すということでないといわれる。

次第に、調査者としてできる限り中立な聞き手になろうとする自分と、Mの投げたボールを受け取り、Mと共に夫を非難したい自分との葛藤が始まった。しかしまだこの頃の私は、インタビューを文字化したデータからも、フィールドノートからも、ことばの側からしかMを見ることができず、Mの現実をMの現実として受け止める (accept her reality as her reality) ことはできていなかった。つまりMの人生に“swing”する準備はできていなかったのである。

### 3.3.2. 「理解する」道具としての“self”

家庭はMの生活の中心であったが、家庭では「母語話者ではない」「主である夫の嫁」として下位に位置付けられ、家庭に「居場所」(小沢、2002: 30) を見つけることは難しかった。

何とかがんばってやろうと。それに私には私一人じゃなくて、むこ

うには家族がいるし、娘もいるから。(I020723)

上にあげたことばのようにMはインタビューで何度か「がんばる」ということばを使っている。そしてそれは韓国での家族につながっていた。Mの韓国での家族は現在の日本でのネットワークにはなく、はじめは今回の調査対象となるトピックではなかった。しかし、調査が進むにつれ、私はMの話によく出てくる「韓国」の家族の話はMを理解する上で、大きな意味を持つのではないかと思い始めた。

調査開始から約5か月がたち、同行調査で博物館の韓国展へ行った時だった。その韓国展はある実在の韓国人一家の家具や所有品すべてを韓国から持ってきて、そのまま展示したことで話題になっていた。中にはドームのような「家」とその外側に映画のセットのような店や会社、学校などが並んでいた。Mは「ほんとに持ってきたんですね。」(F020712)と言って、私に展示品を丁寧に説明し、韓国語で書かれているものは一文一文訳してくれた。

居間に入った時だった。「椅子の感じも実家に帰ったみたい。」(F020712)とMは言って、ソファーに座った。

ソファーのまえにあるガラスのテーブルに青いケースがあって、それを開けてみた。中にはプラスチックの15cm くらいの棒が4本入っていた。(中略)そこにあった新聞を広げ、「この棒を投げて、出た数を紙にしたがって進む」と言う。「すごろくですね。」と私が言ったが、Mさんはそのまま話を続けている。「正月などに家族が全部集まってやります。」Mさんもよくやったらしく、家族を思い出しているのだろうと思う。(F020712)

Mは実際に棒を投げて、ゲームを進めながら説明してくれた。この時の

Mの表情は、過去に「娘」として家族の中心にいた子ども時代は、きっと幸せだったのだろうと思わせるものだった。そしてMがもう一つ表情をくずしたのはソファだった。「椅子の感じも実家に帰ったみたい。」と言ってMがソファに座った時、私は現在のMの家が純日本風の造りであったこと、Mの義母のインタビューで訪れた時、玄関を上がってすぐの畳の部屋に通されたことを思い出した。

筆者の私が結婚当初住んだ夫の家も、木造の日本風の家だった。私の実家は洋風の建物で窓を大きくとっていたため、夫の家の二階の窓の小ささに驚いた記憶がある。ほとんど日が入らないため、昼間でも電気をつけることがあり、たまに実家へ帰ると日差しの明るい部屋にほっとした。

「家」を出て、撮影のセットのような「小学校」に入った時だった。

窓はカーテンがかけられた大きな写真になっていた。

「あのカーテンは生徒が順に洗うんです。」

「うちで？」

「うちで。」

「先生が、カーテン汚くなったね。だれが洗ってきますかと言うと、子どもは、はいと手を挙げる。お母さんは一生懸命洗います。そして子どもにもう手を挙げるんじゃないよと言う。」

私はよくわかると思って笑った。

「私も洗ったことがあります。娘にもう手を挙げるんじゃないよ。」  
とMさんが言う。(F020712)

「お母さんは一生懸命洗います」というお母さんは一般的なお母さんのことを説明してくれたのだろう。しかし、「娘にもう手を挙げるんじゃないよ」と言ったのはMである。

Mが以前結婚したことがあり、娘が一人いることを聞いたのは最初に会った2月の打ち合わせの時だった。そのことを淡々と話すMに私は調査者であることを忘れ、つい「さみしくない？」(F020226)と聞いてしまった。その時、Mは「自分の生活が忙しい。もし(また)子どもが生まれても自分の時間がなくなる」(F020226)と答えた。私はその日、立ち入ってしまったのではないかと反省し、その後私からMの娘のことを聞いたり話題にしたりすることはなかった。

だから、カーテンの話で一緒に笑えたことはうれしかった。私にも同じような経験があった。自分の娘が小学校で「生き物係」になり、休みの日は「かめ」を持って帰ってくると言ったのだった。娘が先生に何と言ったかはわからないが、私はなんとか娘を思いとどまらせようとしたことを思い出し、カーテンの話で笑ったのだった。

「同じなのだ」と感じた。調査の過程を遡ると、この韓国展の時を境に、今までテーブルの向かいに座っていたMがずっと私の横に座ったような、そんな感じをもった。やはり自分では意識しなくても、調査者と被調査者、韓国人と日本人、母語話者と学習者という、相対する枠組みに自分を置いていたのだろう。しかし、日本人の妻、娘をもつ母として生きることの一つ一つの経験が、私を Separate Knowing から Connected Knowing へと変化させたように思う。

Clinchy (1996) は、Elbow<sup>3)</sup> を引いて、Separate Knowing では、「自分を取り除く」のに対し、Connected Knowing では、「自分を折り込む」、または「自分を投影する」ことが求められると述べている。また、McCracken<sup>4)</sup> を引いて、「たとえば質的研究の準備として、調査者は関心のあるトピックについて、自分の個人的な経験の、詳細でシステムティックな理解を構築し、またそのトピックに近い自分の出来事との結合を吟味しなければならない」と述べている。

もちろん、Clinchy (1996) でもあげられているように、単に同じ経験があるからということや、深い思慮なしの肯定は危険であるし、解釈の際は異なる形で検証される必要があると指摘しておかなければならない。

### 3.3.3. 理解への到達

男性が一人の「人」として生まれ、死んでいくのに対し、女性は結婚すると、他者との関係で社会的地位が付与され、「〇〇さんの奥さん」「〇〇ちゃんのお母さん」という社会的属性と、人としての「自分」との間を生きていくことを強られる。女性が「自分」を生きていくことは社会から抵抗を受けることであり、関係性の中で生きていくことは社会から忘れられることである。

周辺化され、ひっそりと暮らす自分は「自分」ではない。Mが本当の自分は「人気ものだった。どんなところでもその席にふさわしい話ができる子だった」(S010730) と話したように、Mにとっての「自分」はまさに「ひまわり」のように明るく、中心にいる「自分」なのである。

冒頭にあげた「ひまわり」の作文を私の解釈で理解できたのではないかと思ったのは、韓国展からずっと後のもう分析も終盤の頃だった。韓国の家族とのMの歴史、韓国展での出来事、現在の日本でのMなど、さまざまなピースを、「私」を道具としてつなぎ合わせていくなかでのことだった。それはだれが見ても同じ客観的な真実ではなく、また論理的な因果関係でもなく、「出来事のあいだのいかにも起こりそうな特定の関連」(ブルーナー、1998:17) をMの物語 (narrative) として理解したということだろうと考える。

## 4. まとめにかえて

本稿は定住する日本語学習者の研究には、従来の人間と切り離された形式でのことばの探究だけでは限界があるのではないかということを指摘し

た。そして、意味をもつ人間の側から、学習者が日本語や日本での生活をどう意味付けているかを見ていく必要性を述べた。人間を研究する方法はさまざまなものがあるが、その一つとして被調査者の意味世界を探るエスノグラフィーをあげた。そして、人間の側からの研究には、被調査者を対象化して、論理的に理解をするのではなく、被調査者との関係の中での理解が重要であると述べた。このような従来とは異なるアプローチで、日本語を第二言語とする定住者の声を拾い上げていくことで、彼らが日本という社会で「自分」らしく生きていくことに、なんらかの形で貢献できるのではないかと考える。

## 謝 辞

本研究の調査にあたり、調査に協力して下さったMさんとその家族、知人の方々、そして、常に励まし助言して下さった青木直子助教授、真田信治教授に心から感謝申し上げます。

## 註

- 1) データからの引用は本文で以下のように示す  
I：インタビュー、F：フィールドノート、S：作文、D：同行調査、数字は月日、たとえば、(F020115)は2002年1月15日のフィールドノートからの引用
- 2) エスノグラフィーには、1)フィールドワークの結果をまとめた「民族誌」という意味と、2)フィールドワークという調査の方法あるいはその調査のプロセスという意味があり、現在は両方の意味で使われている。
- 3) Elbow, P. (1973). Appendix essay: The doubting game and the believing game-an analysis of the intellectual enterprise. In *Writing without teachers*. London: Oxford University Press.
- 4) McCracken, G. D. (1988). *The long interview. Qualitative research methods series* (vol. 13). Newbury Park: Sage.



## 引用文献

- ヴァン＝マーネン (1999) 『フィールドワークの物語 — エスノグラフィーの文章作法 —』 森川 渉 (訳)、現代書館
- 小沢一仁 (2002) 「アイデンティティとダイナミズム」 『日本発達心理学会第13回大会発表論文集』 PP. 32-33、日本発達心理学会
- 古賀正義 (1998) 「対話的多声的方法の一様式として — エスノグラフィーの新たな可能性」 志水宏吉編 『教育のエスノグラフィー — 学校現場の今 —』 嵯峨野書院 (pp. 99-120)
- ネウストブニー・J. V. (1997) 「日本語教育とネットワークの考え方」 『国内の日本語教育ネットワーク作りに関する調査研究 — 最終報告書』 PP. 181-195、文化庁
- バー・V. (1997) 『社会構築主義への招待』 田中一彦 (訳)、川島書店
- ブルーナー・J. (1998) 『可能世界の心理』 田中一彦 (訳) みすず書房
- フリック・U. (2002) 『質的研究入門 — <人間科学>のための方法論』 小田博志、山本則子、春日常、宮地尚子訳 (訳)、春秋社
- フレイレ・P. (1979) 『被抑圧者の教育学』 小沢有作ほか (訳)、亜紀書房
- 保坂裕子 (2000) 「多声の時空間におけるアイデンティティ構築 — アイデンティティ研究におけるナラティブ・アプローチの可能性について」 『京都大学大学院教育学研究紀要』 第46号、PP. 425-437.
- 箕浦康子 (1999) 『フィールドワークの技法と実際』 ミネルヴァ書房
- Belenky, M. F., Clinchy, B. M., Goldberger, N. R., & Tarule, J. M. (1986). *Women's Ways of Knowing: The Development of Self, Voice, and Mind*. New York, NY: Basic Books
- Churchill, E. (2002) Interview with Bonny Norton. *The Language Teacher*, 26(6)3-5.
- Clinchy, B. M. (1996) Connected and separate knowing: toward a marriage of two minds Goldberger, N., Tarule, J., Clinchy, B., & Belenky, M. (Eds.). *Knowledge, Difference, and Power: Essays Inspired by Woman's Ways of Knowing*. (pp. 205-247). New York: Basic Books.
- Denzin, N. K. & Lincoln, Y. S. (1988) Entering the field of qualitative research. In N. K. Denzin, N. K. & Lincoln, Y. S. (Eds.). *Strategies of Qualitative Inquiry* (pp. 1-34). Thousand oakd: Sage.
- Goodall, H. L. (2000) *Writing the New Ethnography*. Walnut Creek, CA: Alta Mira Press.
- Norton. B. (2000) *Identity and Language Learning: Gender, Ethnicity and*

*Educational Change*. England: Pearson Education Limited.  
Polkinghorne, D. E. (1988) *Narrative Knowing and the Human Sciences*.  
*Albany*, NY: State University of New York Press.

(大学院後期課程学生)

## SUMMARY

**On the Studies of Inhabitants Who Speak Japanese as a Second Language: The Possibility of Ethnography**

Manami YAGI

In recent years researchers have seen a number of spouses of Japanese and foreigners living in Japan who do not learn in a particular Japanese teaching institution.

I would argue that traditional research can be limiting because it disregards diversity, contradiction and the environment of people who are inhabitants of Japan. It is required to describe the subject's meaning of "their world" concerning the Japanese language and life in Japan. Therefore I used ethnography, which is one of the qualitative studies, for my research, and here I examine the features of ethnography by comparing it with positivism.

Moreover I mention it is important to understand a subject as an entire person, and I describe the process of how I understand the subject of my research on the basis of "separate knowing" and "connected knowing".

キーワード：定住者 エスノグラフィー connected knowing